東京農工大学農学科昭和47年入学クラス　卒業後50周年記念文集

思い出の記、そして現在

雲と自由の住むところ

はじめに

昭和47年すなわち１９７２年に入学して１９７６年に卒業。今年でちょうど50年。半世紀も経ちました。当時は10代後半から20代前半の、社会も知らず、経済も知らず、政治も知らず、礼儀も知らず、座学以外の技術も知らず、酒の飲み方も知らず、ほぼ何も知らずの私たちも、70台前半の年齢となりました。この間、世間の荒波にもまれ、楽しい思いもつらい思いもたくさんし、これらの知識を蓄えるだけでなく経験も積み、各自様々な人生を歩んできました。仲間によっては成功した者、失敗を経験した者、まあまあ大過なく過ごせた者、皆、人生いろいろだったと思います。

しかし、何よりも幸せなのは、こうやって一同顔を合わせることが出来る幸せ、一瞬でタイムマシンに乗り半世紀をさかのぼる、ため口の会話の中の一瞬に、幸せを感じることができる。そして「あ～、農工大農学科で勉強出来てよかったなぁ～」とつくづく思える瞬間、これを再会の時に、もしくはこの文集を読みながら、ぜひ旧友と一緒に噛みしめましょう！

令和８年１月17日

大伴　秀郎

目次

昭和47年農学科入学の学年は、
私をいろいろな面で育ててくれた…畜産学研究室　鎌田　壽彦　3
入学当時を思い出して…農業生産組織学講座　淵野　雄二郎　6
まだ続いている畜産人生…青木　隆夫　9
定年後は会社経営とブルーベリー栽培…指宿　光明　12
アメリカでの大学生活。楽ではなかったが、
結局これがその後の人生の転換となった…大伴　秀郎　14
千葉に流れて…大橋　幸男　20
卒業後50年を振り返って…梶田　初美　23
卒業、それから…金本　伸郎　26
卒業後50年…川名　晃　28
イネと小麦と…小葉田　亨　31
卒業して50年…佐野　正己　34
私の人生は「節目」だらけ…鈴木　土身　38
土壌学研究室を卒業してからの50年を振り返る…對馬　健　41
からだとの闘い
齢にあらがわずまいりましょう」…中　徹　44
50年の歳月…馬場　仁　47
記念誌に寄せて…吉野　りよみ　49
野菜への思い…渡辺　一義　52

駒場小唄

西條八十作詞

（1）
今朝も早よから　泥鍬担ぎゃ
雲雀きて鳴く鳴く　春の空　サッテモナ
浮世はなれた駒場の里も
春はまた血のような　罌粟が咲く　サウトモナ
駒場ヨイトコな
雲とまた自由の　住むところ　サウトモナ

（2）
夏は日盛り　照る日の下で
伊達じゃないぞえ　草むしり　サッテモナ
暮れて涼風　ビールの手酌
肴また　もぎたて　キュウリもみ　サウトモナ
駒場ヨイトコな
雲とまた自由の　住むところ　サウトモナ

（3）
若い身空で　蹄鉄つくり
フイゴまた吹き吹き　日が暮れる　サッテモナ
牧場のどかに　羊が鳴いて
そとはまた紅葉の　秋日和　サウトモナ
駒場ヨイトコな
雲とまた自由の　住むところ　サウトモナ

（4）
雪の降る日は　ストーブ囲み
語るまた思い出　夏の旅　サッテモナ
恋の樺太　深山の乙女
またとまた逢ふやら　逢へるやら　サウトモナ
駒場ヨイトコな
雲とまた自由の　住むところ　サウトモナ

昭和47年農学科入学の学年は私をいろいろな面で育ててくれた

畜産学研究室　鎌田　壽彦

私が「雲と自由の棲むところ」の住人にさせていただいたのは昭和48年7月であるので、昭和47年入学の学年の皆様は農工大生活において1年と少し先輩にあたる。

この学年と私との関係で特筆することは、一つが、私が初めて授業を担当したこと、二つ目が2年間の研究室生活を初めて最初から共に経験したことである。

一つ目の私にとって初めての授業担当は学生実験であった。記憶が薄れてきているが、農学科の履修科目に農学実験第一・第二・第三とあって、第一は2年次に全員が受講対象、第二は3年次で自然科学系の研究室に入室した者が受講対象、第三は4年次で研究室毎にその研究室所属者が受講対象だったと思う。

畜産学研究室担当としては、第一で森田先生が統計演習を行い、第三は自研究室で行う諸研究を読み替えていた。第二が私個人での担当であったが、昭和48年度分については、私の前任の太田正義先生が済ませてくださっていて、私は次年度の49年、すなわち皆様が3年次になった時が最初であった。これまでの実施内容もあったが、一部内容を変更しようと考えた。畜産学研究室の担当として、他の研究室との一番の違いは動物の命を扱うということだと思えた。

そこで取り上げたのが、ラットの卵巣を摘出する手術を行い、膣垢像で卵巣の働きが無くなっていることを確認したのち、雌性ホルモンを投与し発情状態にし、最後はと殺し繁殖器の重量を計るというものだった。

この実験を行うにあたり、受講者の反応を探りながら私なりに説明を試みたつもりであるが、と殺についてはかなりの抵抗感があり、初年度のある班は実験台の引き出しの中にラットを放置していった。

教育実習もしたことがない私にとって人生最初の授業経験であった。

二つ目の2年間の研究室生活を共に経験した学年についてであるが、昭和48年7月に私が研究室メンバーになったときには、大学院生と4年生、3年生がいて、私が一番新参者だった。はれて新人を迎える昭和49年の研究室の歓迎会では研究材料として出ていた鶏肉を実験器具乾燥機で焼いて提供した記憶がある。

翌50年の4月には6号館が完成し、園芸研、肥料研と畜産研が2号館から引っ越し、2号館に残った研究室も面積が広がった。

余談であるが畜産研と肥料研が6号館に移ったのは隣り合っていた研究室の教員間の関係によると聞いている。畜産研は2号館中庭に鶏を飼っていたので鳴き声や臭いなど「畜産公害」でトラブルを引き起こしていたらしい。

6号館新設の予算がついてから、完成までの間にオイルショックに伴う建築資材の高騰があって完成時には当初の設計どおりにならず、一部コンクリートが打ちっぱなしだったり、天井が張っていなかったところがあった。後年には、あちこちの壁にひびが入っていた。

6号館への引っ越しにあたり、研究室メンバーに手助けの願いをしなかったが、何も声をかけていない新3

畜産研の研修旅行・東北農業試験場にて・昭和 50 年 8 月
中列左から、鎌田、榎本、古西、青木

年生が自発的に春休みに来てくれて小型の物は運び終え、実験台やゼミ室の大型机は新学期が始まって皆で運び上げた。

畜産研では学生の部屋を設けたが、「建新(たてしん)」という新設に伴う什器の購入費で一人用の事務机を部屋のスペースに置けるだけの個数入れた。一人に一つの机があれば、授業以外の時間にそこで勉強してくれる、ほしい、と思い設置したが、なかには机の上全面にはずれ馬券を貼って、研鑽の成果を示してくれた猛者もいた。

昭和47年入学の学年は、私の教員としての初期に、研究報告で言えば材料及び方法にあたる貴重なものを提供してくださったことになり、感謝している。

入学当時を思い出して

農業生産組織学講座　淵野　雄二郎

1　池コンでの出会い

皆さんが入学した年は、私が修士課程を修了して、本学に教務職員(教室系事務職員)として任用された時期と重なります。既に昭和46年4月から新日本出版社の「経済」誌に任用予定で、編集作業に携わっていましたが、ある日、井上完二先生から呼び出しがあり、「農業経済系の講座新設が決まった。担当教授の発令はまだだが、鹿児島大学の梶井功教授の任用の予定である。ついては、新しい研究室づくりのために、学内発令の教室系事務職員のポストが得られたので、君を推薦したい」ということでした。本館の一部屋をあてがわれ書棚、机等を　調達し、梶井教授(8月1日赴任)を一人で待つことになりました。

その後、中安定子助教授(12月1日)の任用が決まり、昭和47年度から農業生産組織学講座がスタートしました。私も、教員スタッフの一人として、学生、院生諸君とも襟をただして対応することが求められました。その第一歩として臨んだのが、新入生の諸君との”池コン“(一般教育事務棟前の池の周りの芝生での飲み会)でした。初対面でしたが、皆さんと親しく語り合うことが、農学科教員としての第一歩でした。今でも忘れられないのは、札幌ラーメン3杯を、岡持ちではなく、大きなお盆トレーで、府中駅に近い欅並木通りのラーメン店から徒歩で運んできた青木君の姿でした。

池コンは短い時間の語り合いでしたが、個性派ぞろいで、私にとっては、半人前の教員を支えてくれる大事な友人になるだろうと確信しました。

2　農ゼミサークル　”大地の会“　の立ち上げ

幸いに、大学院時代にたちあげた、出稼ぎ農民を支援する“大地の会”があり、自主ゼミサークルとして、援農ボランティアなどに取り組んでいました。ある日、農ゼミ委員の佐直明芳君(S47農科卒)から「日農ゼ

ミ20周年記念大会が本学で開催されることになった。そのために、学内の自主ゼミの充実と実績づくりが必要で、教職員のみなさまにもご協力頂きたい」という相談を受けました。

私も教職員組合の一員として、農ゼミ機関紙“耕起”の発行や、講演会、シンポジウムや農村見学、交流会などの企画等に協力、助言をいたしました。当時のことを思い起こさせる“耕起”第2号（昭和47年発行）の主な項目を掲げておきます。

（1）特別寄稿『近代科学・技術の功罪』
　大谷省三（本学農業経済学教授）
（2）日本科学者会議―農工大分会について
　岡本奨（本学農芸化学教授）
（3）学生報告―自然保護について
　國見裕久（本谷研究室　養蚕学科4年）
（4）講演『ベトナムの枯葉作戦』
　伊藤嘉昭（農技研主任研究員：農学科S25卒）

3　昭和47年度―農ゼミ新入生歓迎プログラム

この機関紙“耕起第2号”には、昭和47年新入生歓迎企画が添付されています。

（1）4月15日　農ゼミ説明会、学内の自主ゼミ・研究組織の紹介
（2）4月21日　シンポジウム「農業・農学をどう学ぶか」―話題提供者―本間先生、柳下先生、淵野さん
（3）4月29日～30日　援農、見学、交流会―千葉県匝瑳郡野栄町に就農した、熱田正行氏（農学科S44卒）訪問―

農ゼミ見学会　熱田正行氏宅訪問

熱田家は、稲作と養豚の複合経営で、農繁期の大地の会グループの援農活動はその後も続き、新規就農を目指す卒業生も何人かうまれ、東都生協と連携した産直センターの担い手として成長しました。

なお、”大地の会“は、その後、”耕地の会と“改称し、学友会サークルとして、新潟県柿崎市、宮城県丸森町、福島県喜多方市などでの援農、農村交流活動に熱心に取り組んでいます。

4　日本農学系ゼミナール20周年記念大会の本学開催

(1)日本農学系ゼミナールの第一回全国大会は、1954年12月24日から3日間、農工大学キャンパスで、「新しい農学はどうあるべきか」のテーマを掲げて開催されました。全国から24校、総勢250名の代表が集まり、総会と幾つかの分科会を通じて、「日本農業の真の発展方向と農学の正しい在り方を学生の創造的研究を通じて明らかにする中で農学生の生き方を追求し、もって日本農業と社会の発展に寄与すること」を目標に掲げました。第一回大会議長は濱田龍之介先生(農芸化学科S32卒)でした。

(2)1974年12月に、日農ゼミ20周年記念大会が、20年ぶりに本学キャンパスで開催されました。北は北海道から南は九州沖縄まで全国49大学の学生500余名が集い、「国民のための科学・農学を目指し、大学に新しい息吹を」という大テーマを掲げて、各自の研究成果を交流し、今後の活動の発展へ、新たな決意をしました。

特に、クラスゼミ・学科ゼミの重要性が再度確認されたことでした。この大会では、20周年を記念して、大谷省三教授の記念講演や文化祭典など多彩な催物が行われました。大学当局や教職員組合などの協力支援があったことも、大会運営の大きな支えになりました。

まだ続いている畜産人生

青木　隆夫

大学生活はとにかく楽しかった。部活は高校時代の汗臭い柔道と大きく変わって、練習は、女子美に出かけるグリークラブ、農学科の連中とは麻雀、パチンコ、そして土日は競馬・・・これでは勉強している暇がない！畜産学教室のゼミの最中は、できるだけ森田教授と目が合わぬようしていた。

さて、卒業後は畜産の先輩が待っている(株)埼玉種畜牧場・サイボクへ。森田先生から、「農工大に入れたのだから、君は馬鹿ではない。何かを頼まれたときは、すべてできると言え、そうすればどうにかなる」という命令があったような気がした。

ここには、農業書のベストセラー「養豚大成」(養賢堂)の著者笹崎龍雄社長(S 15獣医)がいた。朝は種豚たちの餌くれ、糞カキが終わると気合の入った朝礼と朝飯、昼は草刈り、飼料配合、管理作業の仕上げは雄豚の運動場で相撲大会だ。夜は分娩当番、研修生たちの指導、それが終われば酒、愚痴、社宅へストーム、さらに酒の日々…豊橋飼料に就職した小野村が来たときは、しこたま酒を飲んで先輩の家の風呂場のガラス戸をよろけて割ってしまった。

サイボクでは、種豚の飼育や販売のほかにも「心友会」という全国の養豚家の組織があり、その事務局も担当した。全国の支部の総会では種豚の営業方々、各地の宴会を毎年楽しんだ。東北の温泉には混浴があり、特に岩手県台温泉の千人風呂では白いお尻に興奮したものである。ほかにも養豚の技術研修を口実に海外視察旅行も自由に企画した。

その会社も25年間勤めて辞めた。辞める3年前から農産物直売所の担当をし、小売は素人の自分が責任者となった。最初の1年は8億円、次の年に10億円売れた。全国のJAや生産者グループの視察を案内した。皆が注目している、それが面白くなって来たのだ。あとを後輩たちに任せ、「何だよ～アオキさん、逃げ

るのか」と言われながらスタコラした。

で、今までの経験を金にするにはと考え、ベネットという会社を2000年9月に作り、翌年の3月に「農産物直売所◎成功の秘訣」を出版した。家のローン返済、事務所開設などで退職金は、ほぼなかった。印刷費を賄うため、雑誌のように広告営業をした。知り合いの高知県馬路村農協、群馬県沢田農協、寺岡精工、東芝テックなどを拝み倒し、本を売る前から黒字にした。

肝心の本の販売は、日本農業新聞の1面下段にある書籍広告の枠を使った。それと共に書評を自ら書いて、書評欄へ掲載した。中身は濃いが96ページの薄っぺらなので書店には置かず、通信販売することにした。

そんなこんなで、まあ頑張って出版した本は最初の2-3ケ月で3千部完売した。農家に読んでほしかったのだが、一番のお客さまは農工大学の卒業生も数多い各県の改良普及員であった。

書籍は売れれば面白い。売って儲かるだけでなく、講演の仕事が次から次へと舞い込んできたのである。1回につき旅費別で10万円という値段を勝手に付けたが、当時は自治体や農協に予算があり、最初の1年間で50回以上出かけたと思う。キャッシュでいただくケースも多かった。出張先の埼玉では渡辺、金本、島根では反田、小葉田にお世話になった。岡山では、ほとんど学校では接触のなかった河野にも会い、氏家を呼んで酒を飲んだ。

次に行ったのはセミナーの主催である。出版もそうだが、セミナーがニュースになれば世間の信用がもう1ランク上がる。講師を外部に依頼し、その先生方と一緒に勉強会を行う。そのなかでマーケティングの神様・船井総研創業者船井幸雄氏にもご登壇をお願いした。船井氏は、京大を卒業したが駒場寮農学科経由で、という縁でもあった。

自分もそれらを見習い、パワーポイントの紙芝居を使いながらまことしやかに直売所を解説すると、コンサルタントの依頼が来るようになった。自治体や農業

関係者だけでなく、「ドンキ」「食べログ」「カルディ」など、流通企業からの受注があり、生活の為と無節操に引き受けたりもした。

というわけで、20年以上も農産物直売所や道の駅のコンサルタントを続けている。畜産から足を洗ったわけでない。養豚専門書の出版と共に、養豚家の6次産業化の支援などを行っている。また、TOKYO X生産組合のアドバイザーとして、販路開拓や出荷先への販売価格・頭数などの調整をしている。今年からは、系統造成という育種事業の調査も東京都から受注した。その時の審査に農学系大学の卒業証明が必要になった。大学に出向いてもらったのだが、発行人である千葉一裕学長は、グリークラブの3年後輩、

タイムスリップしたようであった。

仕事はしているものの、コロナ禍以降自宅にいることが多くなり、家畜を飼いたくなった。家族と相談し、鶏をやってみよう、ということになり令和5年の春に東京都の青梅畜産センターからロードアイランドレッドを11羽購入した。中雛が1羽あたり消費税込み550円でお買い得だった。

令和7年の12月、更新用に導入した同系統のロードが卵を産むようになったこと、畜産教室からボリスブラウンの若鶏が伝染病予防のため廃用になると聞いて導入、古い親鶏は首を切った。食べやすくなると思ってスモークしたが、筋肉は硬いし、腱や筋膜が発達してボロな歯では噛み切れないので困っている。

卒業から50年過ぎたが大学時代の先生、先輩そして同輩、後輩に助けられながらどうにか歩んでいる。

定年後は会社経営とブルーベリー栽培

指宿　光明

東京農工大学在学中は、バレーボール部に所属し、4年間、文字どおり汗を流す学生生活を送りました。練習は厳しかったですが、それ以上に楽しかったのが、部室での仲間との時間です。とりわけ麻雀を通じた交流は、単なる遊びにとどまらず、人との付き合い方や勝ち負けへの向き合い方など、人生の幅を大きく広げてくれたように思います。

研究室は園芸を専攻し、松本先生、志村先生、箱田先生をはじめとする諸先生方から多くの刺激を受けました。そのご縁もあり、卒業後も毎年開催されるOB会には欠かさず出席し、学生時代のつながりを今も大切にしています。

卒業後もバレーボールから離れることはありませんでした。母校である横須賀高校において、実に50年にわたり、高校生を相手に週3回の指導を続けてきました。仕事をしながら長年にわたって指導を続けられたことは、大きな誇りです。横浜青果市場の荷受会社である丸中青果に定年まで勤めることができたのも、こうした生活リズムと環境に恵まれていたからだと思います。

市場勤務時代は、農工大の先生方をはじめ、多くの方々から影響を受けました。種苗の可能性、新しい作目の開発、大型量販店向けの流通、さらには加工野菜への展開など、現場にいながらも常に「次」を考え、独自の視点で開発業務に取り組んできました。市場という場所は単なる流通の場ではなく、日本農業の課題と可能性が凝縮された現場であり、私にとっては学びの宝庫でした。

定年後は、日本農業をもっと元気にしたい、そして産地の活性化に少しでも貢献したいという思いから、

小さいながらも会社を立ち上げました。日本最大の集荷組織である農協とは異なる仕組みを志向し、生産者と直接話し合いながら、種子の選定から生産指導、さらには農家の利益を高めるための流通・販売まで、一貫した取り組みを行っています。効率よりも納得感を大切にし、生産者と同じ目線で考えることを何より重視しています。

横須賀のブルーベリー畑で、青木の家族も毎年収穫に来る

ブルーベリー栽培については、会社を辞める前から構想を温めていました。園芸研究室とのつながりを保ちながら、さまざまな品種を選び、横須賀の地に約7反の土地を借りて栽培を行っているところです。

定年後の新たな挑戦であると同時に、これまで学んできたことを実践する場でもあります。

体力づくりを兼ねて始めた栽培ですが、ブルーベリーは一粒一粒手で摘み取る必要があり、収穫作業がなかなか大変なのが正直なところです。それでも、6月末から8月にかけて次々と実る果実を見ると、その苦労も忘れてしまいます。時間があれば、ぜひ畑に遊びに来てください。自然の中で、実りの喜びを一緒に味わいましょう。

アメリカでの大学生活。楽ではなかったが、結局これがその後の人生の転換となった。

大伴（西村）秀郎

1976年3月に農工大学を卒業して、アメリカの大学の修士課程に進むべくTOEFLという英語の試験と大学院の基礎学力を見るGREというテストのための勉強をしつつ、アメリカの大学の様子を知るためにアメリカ文化センターに時々訪問した。その間、身分は作物研の研究生となり、石原先生の光合成と気孔開度の研究のお手伝いをしたりなどしていたが、現在と違いアメリカ留学に関する資料、情報は非常に少なく、またTOEFLの得点も入学許可される点になかなか到達できず、意を決して1976年の12月24日、忘れもしないクリスマスイブの日に羽田からロスアンジェルス(以後LA)に向け旅立った。

その時、平沢先生をはじめ、黒田君(今は岩手大の黒田教授)たちが見送りに来てくれ、黒田君曰く「西村さん、これで勉強してください！」と本のような包みを渡してくれた。「なんだろう？」と飛行機の中でその包みを開けたらなんとドークマンが書いた漫画「花の応援団」5巻だった。しかし、これが何よりも嬉しかった。日本語に飢えていた私はその後3年間、この本を何回もむさぼり読んだものだった。

さて、LAでは親戚のおじさん(正確にはおばあさんのお姉さんの息子)の家に転がり込んだ。おじさんは当時LAの検視局の局長をやっていて、奥さんも日系2世でUSC(南カルフォルニア大学)の助教授で、アメリカにはよくある芝生付き、ガレージ付きの大きな

家だった。そこから英語学校に半年ほど通いながら、アルバイトをしたり、たった500ドルで1964年製造のオンボロフォルクスワーゲンを買って自分で直したり(ワイパーや運転席のドア、ラジオが壊れていて、ジャンクヤードに中古のドアを丸ごと買いに行った。アメリカでは当時車検がなく、ワーゲンのような大衆車はこのようなことが可能。確かドア一枚25ドルだったと思う。)しながら、LAに近い大学で農学部の大学院があるところを探していたが、英語学校のおかげと毎日英語を使うのでTOEFLの点も急上昇し、GREにも合格し、カルフォルニア州立大学フレスノ校とノーザンアリゾナ大学から合格通知が来た。結局より近いフレスノに行くことにした。

8月のある日、LAを去る当日、おじさんから餞別をもらい、そのオンボロ車に乗って出かけたが、近いといってもフレスノまで220マイル=350㎞くらいある。とにかくオンボロ車なのでハンドルから手を離すと、アライメント(車輪とハンドルの関係)がずれていて、左側にだんだん寄って行ってしまう。それを右にハンドルを少し切りながらの運転だった。ラジオをかけると何故かどの放送局もエルビスプレスリーの曲ばかりやっている?そう、その日はプレスリーが死んだ、ちょうどその日だった。

フレスノに到着したが、知り合いも、友達も、誰もいない。全くのゼロからのスタートだったが、若かったせいか、これからが大学も始まり本番だと張り切っていた。まずは、住むところを探さねばならない。たまたま飛び込んだ大学の目の前にあるアポートで、ヨルダン人2人とシンガポール人1人に出会った。彼らも部屋を探していたが、4人専用のアパートということでこの4人での生活が始まった。しかし、家賃が高かったので、2ヶ月で4人ともそこを出て、私は10歳年上のユダヤ系南アフリカ人と古い安いアパート(1か月たった165ドル)に転がり込んだ。結局、2年半後にそこを出て日本に帰るまで、ルームメートは途中でモルモン教徒のアメリカ人のおじさんに変わったが、その古いアパート

に住んだことになる。

学校が始まると、案の定、英語のレベルが高くて、授業についていけない。それで安物のテープレコーダーを買い、教授連に話をして、授業の内容をテープに録音させてもらっていた。それをアパートに帰ってから何回も聞いて授業に少しでも追いつこうとしたが、アメリカの大学院の授業は中身が濃く、予習や宿題で教科書や、配られた資料を何十ページも読んでいかなければいけないのが大変だった。

2年目になると授業にもなんとかついていけるようなったが、今度は資金が、お金が乏しくなってきた。両親が離婚したので(それが理由で苗字も西村→大伴に変わった)母子家庭となり住む家は祖父母のところに母子3人で転がり込んだが、母のピアノ教師の収入だけで余裕がなく、アメリカに行くときに、祖父、祖母、叔父、叔母など、から少しずつ援助してもらったのだが、これが尽きかけてきた。母からの仕送りは期待できない。ところが運のいいことに、大学内にあるカフェテリアのバスボーイ(客が食べた汚れた皿を片付けて、最後にレストランの掃除をする係)の仕事と日本食のレストランのコック見習いの職が見つかり週に20～25時間ほど働き始めた。これで毎月の生活費は帰る時まで十分に足りた。後半、バスボーイから学生寮のコックに昇格し、給料も少しずつ上がって行き、帰国直前には時給4ドル5セント(当時のレートで850円くらい。カルフォルニアでは食品、ガソリン、家賃などの物価が安かったので、これで十分生活できた)まで昇給した。

しかし、アメリカ生活2年目に入ったころ、風邪をこじらせて気管支炎になってしまった。貧乏学生だったので、大学の医務室で見てもらえる学生の保険が20ドルだったが、それもケチったため、医者にも行けず(アメリカの医療は今でもそうだが、とても高額)、自然治癒にまかせてあとはアスピリンか何かを飲んでごまかしていた。39度以上の熱が出た時もバスボーイの仕事にフラフラしながら行ったが、非常に辛かった。し

かし、休むわけにはいかない。さらに中間テストの時期で、準備もできなくて一つの科目、Plant Nutrition(植物栄養学)でD(2点)を取ってしまった。フレスノ校では大学院では平均点でBアベレージ、すなわち3点以上取っていないと卒業できない。Dを一つとると、A(4点)を2つ取らないと平均3点のBとならない。それで、先生が変わった2学期、のちに自分の修論の担当教授の一人の Brownell 先生の Plant Nutrition を取り直し、また別の科目の Agricultural Experiment も取ったが、その時は身体は回復していて元気だったので、しっかり勉強してなんとかAを取ることができた。

そして、2年が経過して取得単位も卒業できる見込みが立った頃、最後の2つの難関のひとつ、卒業試験の口頭試問を受けることになった。これは3人の教授から2時間〜2時間半にわたっていろいろなことを聞かれ、学生は黒板の前でそれらの質問に答えなければならなかった。「Hidero, ここに一本の植物が植わっている、そこの根元に砂糖をかけた。さて何が起こるか?そしてその理由は?説明しておくれ!」という回答が一つではない、comprehensive(包括的な)質問があったと思ったら、「光合成のカルビンサイクルとヒル反応、全部、黒板に書いておくれ!」などという超難解な質問が飛んできた。答えるのもしどろもどろで、試験の結果、当然不合格。で、2ヶ月後に再試験を受けることになった。

その時は、ただでさえ英語のハンディがあるのに、「これはもう受からないかも・・・」と思いかけたが、考えた末、意を決して事前に3人の先生の事務所に行き、

「もしかしてで良いのですが、どのような問題がでるかもしれませんでしょうか?」

と厚顔にも聞きまくった。恥ずかしいというよりもその時は必死で、先生のコメントを書きとめ、カルビンサイクルなどは丸暗記し、試験に臨んだ。2回目ということもあって、少しは自信があったのと、必死の丸暗記で(結局、各先生の教えてくれた内容の3割ぐら

い実際に試験では出た)前回に比べてすらすらと答え、あの複雑なカルビンサイクルも書くことが出来た。そして、試験後、部屋の外に出て待つこと5分。修論の主教授の Dr.Hile がドアを開けて出てきて「Congratulations !」とニコニコしながら握手を求めてきた。この瞬間は忘れもしない出来事で、今でも鮮明に覚えているが、握手をしながら、身体が震え、おもわず日本的にお辞儀をしてしまった。

次の難関は修論だった。石原先生から頂いたテーマの気孔開度に当時カルフォルニアでは注目を浴びていて果樹でよく使われていた植物ホルモンをテーマに選び、無謀にも水耕栽培で育てた水稲にかけてみて、その反応をみてみることにした。「水稲の気孔開度と植物ホルモン」などというテーマは当時誰も興味を持たないものだったので、先生方も何も言わずに、あっさり許可して下さった。温室の一室を借り、Dr.Hile に言って必要な器具、薬剤を買ってもらい試験を行ったが、案の定、水稲は各種ホルモンに対して反応せず、一部反応したが、今から考えると、ポットの置いた場所やホルモンが入った水の散布量の違い等々、他の理由によるものだと思う。このように結果ははっきりしないものだったが、英語で修論を書かなければならない。まず、第一稿を書いたが、Dr.Hile に見せたら、散々な出来で「Hidero! 言っている意味はわかるが、英語ではこうは言わないのだよ！」とダメだしされてしまった。しかし、何十ページもある論文の英語を全部書き直すのはたいへんだ。そうしたら Dr.Hile が、日曜日に自宅で、私の書いたひどい英語の論文を、直して言い直してくれたものを、テープに録音してくれた。そして、それをもとに原稿を起こした。何時間にもわたる作業だったが、先生は休みをつぶしてよくやってくださったと思う。

卒業して二十数年後、フレスノに行き先生に再会したが、学部長に昇進していた先生はとても喜んでくれ、別れ際にハグしてくれたが、さすがにその時は涙が出た。Dr.Hile だけでなく、Dr.Brownell、Dr.Karli、

Dr.Ball、Dr.Bader など多くの先生に言葉にならないほどお世話になった。彼らの援助がなかったら卒業できなかったと思う。当時は、ベトナム戦争直後でアメリカ自体には元気がなかったが、貧乏で英語もろくにできない日本人学生を暖かくサポートしてくれた。アメリカの良心というか当時のアメリカらしいおおらかな気持ちに囲まれていて、非常に運が良かったと思う。

結局、日本に帰国後、アメリカの会社に就職し、その後、スイスの会社、ドイツの会社と渡り、最後にはJICAからモロッコに駐在したが、このアメリカの貧乏でほぼ全て一人で切り抜けていかなければいけない(しかし、多くの人の善意、助けがあった。感謝！)3年間の経験が、その後の自分の基礎を築いたと思います。

千葉に流れて

大橋　幸男

昭和53年2月、私は木更津駅発豊英ダム行きバスで上総高校へ採用の打ち合わせに向かっていた。バスには同時に採用される何人かが同乗していた。我々の会話を聞いていたお年寄りが「お兄さん達、上総高の先生になるの、大変だねえ、オートバイに乗ってる生徒ばっかりだよ」とアドバイスを下さった。忠告どおり、毎週土曜日の富津公園での「族の集会」には多数の生徒諸君が参加していた。千葉県有数の暴走族集団の学校だった。かくして私の千葉県での教員生活が始まった。今思えば毎日が取っ組み合い、殴り合いの緊張の連続で、とても楽しい毎日だった。現在の「教員服務規程」を適用すれば何百回懲戒免職になっていただろう。

以来、成田園芸、印旛、流山、農業大学校、成田西陵、流山と35年の現役教員生活を無事？送ることができた。特に印旛高校には16年間在籍し、担任したクラスからプロ野球選手や社会人の著名選手を出し、農業大学校では花き農家の後継者を育成、そして成田西陵、流山では柄にもなく管理職を経験した。これは決して体制になびいたのではない。

戦後一貫して農業教員の待遇改善の活動をしてきた「全国高等学校農場協会」の会長に就任するに当たって、「国会議員への陳情や文部省の幹部との折衝」に管理職であることが必要といわれ、たまたま「昭和天皇崩御」の際の恩赦でストライキの処分歴が消えたことで潜り込んでしまった、ということである。

退職後は初任者研修を担当していたが、世代間のギャップと最近の若い教員の感覚にはついて行けないと感じて退職。そして在勤中から縁のあった千葉県生

涯大学校で教壇に立つことになった。「教えることへの情熱」がなくなったときが辞める時、と考えているが、まだ残っているようで、現在は毎日早起きして松戸市矢切の千葉県生涯大学校浅間台教室に勤務している。55歳以上の千葉県民であれば誰でも入れるが、①生活にゆとりがあり、②身体が丈夫で、③知的好奇心がある、というのが本校学生の一般的な傾向で、それは高学歴・高収入で社会的に実績のある人たちである。そのため、授業は手を抜けない。必ず数時間の授業準備はする。現役の教員のときにそうしていれば、もう少しまともな教員になっていたかもしれない。

しかし、今になって思うと、人にはその判断が人生を左右する転機となるいくつかの出来事があるものだ、と痛感する。先ず東京教育大への入学手続き直前に「おまえが来ると迷惑だ！」と東京教育大職員の叔父に反対されてやむなく農工大へ入学したこと。

家から通学して母の農作業を手伝うつもりでいたので、これは大事件だった。非農家から嫁に来て（家を顧みない父親のせいで）、農作業が辛く夜中に一人泣いていた母親を思ってのことである。

大学院の入試の論文に「農学栄えて農業滅ぶ現状がある。今の大学はこの農民の深刻な状況に応えていない」と書いて、石原先生に「君、そういう評価なら大学院に来る意味は無いだろう。そもそも、授業に全く出ていない君が、大学院に来て何をするのか？」と言われ、論争して進学をあきらめたこと、さらに「裏口」から採用されるはずだった栃木県の教員の口を父親に背いて棒に振ったこと。ああ、あの時ああしていたら、全く人生変わっていたな、と思うことが多々ある。しかし、何を今更である。

ただ、在学当時、渡辺直吉先生が「日本には、500万人の農民がいるが、この農民に寄生して生きている人間が同数ぐらいいる。我々もその一人かも知れないな。」とおっしゃっていたのを思い出す。全く授業に出なかった私が唯一大学で学んだことは要約すれば、「農民の寄生虫などであっては決していけない。どうや

つて農業に貢献するか」であったと思う。そして「いかに農民に近づくか」これが今まで一貫して心に留めてきたことである。

自分流に解釈すれば、あの偉大な農民作家の宮沢賢治は農民たり得なかった。いかに農民に近づこうとしても、「金貸し」の生家は「冷害」で農民が苦しめば苦しむほど儲かった。これを否定して「いかに農民に寄り添うか」これが賢治がその生涯で追求したことであろうと勝手に解釈している。もちろん、この偉人には足もとにも及ばないものの、生きる姿勢だけは堅持してきたつもりである。

現在週４日教壇に立ちながら、休みの２日は知人が高齢で耕作できなくなった畑を借用し、知り合いの何人かを集めて耕している。忙しい毎日である。

卒業後50年を振り返って

梶田　初美

1　仕事の事

卒業後、大塚化学薬品(大塚製薬のグループ会社で、肥料・農薬の製造販売会社。水耕栽培用肥料ではトップシェアーの企業)に就職しましたが、3年で退職し、大学(農学研究科修士課程、土壌研)に戻った後、愛知県職員となりました。

愛知県庁では農産物の生産振興の仕事が長く、米・麦・大豆・野菜・特用作物(茶・タバコ等)の生産振興に従事しました。在職中は米の生産調整(減反)が長く続いていましたが、幸いにも生産調整に携わることは無くて済みました。

愛知県職員としては再任用期間も含めて34年間働きました。退職後は畑で野菜・果樹を作る傍ら、駅駐輪場の管理員や戸建住宅の庭木剪定の仕事をしながら現在に至っています。

2　家庭の事

妻と結婚したのは昭和58年(1983年)でした。名古屋で挙げた結婚式には小林、川名、渡辺、土壌研の坂上先生に出席していただきました。對馬には招待状を出しましたが欠席でした。

子供には3人恵まれ、長男、長女は良き伴侶を得て家庭を築き、それぞれ2人の子供があります。私にとっては4人の孫で、孫からは私はグランパ、妻はグランマと呼ばれています。

ただ、次男を平成30年(2018年)事故で亡くしました。24才でした。亡くした時から夜うなされるようになり、夜良く眠れるように昼間は目一杯身体を動かすようにしました。駐輪場の仕事を始めたのもその時からです。

この頃は、夢に出て来る頻度も少なくなり、ようやく彼の死を受け容れられるようになってきました。

3　趣味の事

学部時代、吹奏楽部と探検部に所属していました。吹奏楽部ではトロンボーンを担当していましたが、あまり熱心な部員ではありませんでした。

探検部では、奥多摩、奥秩父、八ヶ岳、富士山麓青木ヶ原樹海等でフィールドワーク（テント泊で縦走やルートファインディング）を楽しんでいました。

探検部の延長で、卒業後も思い出したように山登りをしてきました。登った主な山としては、御嶽山、乗鞍岳、恵那山、富士山、南アルプス北岳です。

御嶽山は、噴火で多くの犠牲者を出した年の3年前、富士山は令和5年（2023年）、南アルプス北岳は令和6年（2024年）に登頂しました。富士山と北岳は、登山ガイドに助けられて登頂しました。

登り残して気がかりな山としては、岩手県の岩手山、早池峰山がありますが、どうなりますことか。

4　小林孝一君の事

小林とは学部時代特に親しい間柄ではなかったのですが、卒業後によく付き合うようになりました。互いの結婚式に出席したり、新潟へ遊びに行ったりしていました。

そんな彼が平成18年（2006年）に病死してしまいました。葬儀には川名と私が出席させていただきました。その後、一周忌に墓参りをしようという話が出てきまして、同級生の皆さんにご案内したところ、青木、川名、對馬、生産組織研の淵野先生と梶田の5名が墓参することになり、平成19年（2007年）4月21日に新潟県刈羽郡刈羽村（現柏崎市）の小林の実家のお墓に墓参させていただきました。また、その節、中坪と吉野（現姓吉村）から御霊前を託され、奥様にお渡ししました。有難うございました。

墓参当日は結構良い天気だったのですが、墓参最中に突然風が出て来て、にわか雨が降りだしました。ほんの短い時間でしたが、小林が挨拶してくれたよう

に感じました。

私は本来、無神論者で、超常現象など全く信じていませんが、その時は小林の魂の存在を感じました。

5　「今日用(きょうよう)がある」事

「今日用がある」とは、「教養がある」事ではなく、日々為すべき事がある状況です。日々為すべき事が何も無く、ただ3食食べてあとは寝るだけでは、認知症まっしぐらです。

今日為すべき事が、前日寝る前、あるいは当日朝起きた時に直ぐ出てくる状況を続けていく事を大切にしていきたいと思っています。

思いつくまま、仕事の事、家庭の事、趣味の事、小林孝一君の事、「今日用がある」事を書きました。最後までお読みいただいた方に感謝いたします。

また、このような企画を立案していただいた青木、指宿、大伴、古西、佐野の各氏に御礼申し上げます。

卒業、それから

金本 伸郎

卒業前後

私が農工大に入学したのは、生来の自然好き特に蝶の採集飼育などに資する知識研究を深めたいとの思いでしたので農学科の皆様にはご迷惑をかけたにもかかわらず授業や試験でお世話になったこと、まずお詫び、お礼したいと思います。

日本 300 名山の一つ二岐山山頂にて

就職は埼玉県庁ですが、希望の研究職ではなく本庁の行政職で当時米の生産調整のために進められていた水田裏作麦、大豆の生産振興が担当でした。入庁後間もなくのころ、現地調査に出かけて麦の種類(小麦、大麦など)が全く分からず、情けない思いをしました。大学の勉強をもう少しまじめにやるべきだったと深く反省しました。

県庁時代

36年間の県庁勤めで多様な仕事に携わりましたが印象深い話をいくつか。

①出先機関での仕事で農地法許認可事務を担当しました。市街化区域を除いて農地は原則として住宅等に転用できませんが例外的な転用の可否をめぐって様々な政治的、暴力的圧力がかかります。自宅への脅し電話や現地での威嚇行為などなかなか大変です。

②ある商業新聞に47都道府県ですぐ思いつく農産物ブランドの消費者アンケート調査がありました。埼玉県は2品目しかなく下位の位置づけでした。深谷ネギと狭山茶です。知事からの檄が入り担当課として県育成の梨の新品種「彩玉」販売戦略に着手実践、

さらにイチゴ新品種育種体制の強化を図りました。イチゴは近年「あまりん」、「べにたま」が全国イチゴコンテストで最高金賞を受賞しています。

③県農林総合研究所長として関東地域の場所長が持ち回りで務めていた都道府県農業試験場所長会の会長に就き国や地方の研究者の皆さんと交流できたことは貴重な体験となりました。

大学同窓会

まずは大伴さん、同窓会会長就任おめでとございます。同期として誇らしく活躍を祈念しております。

埼玉県庁農林部には本学OBが多く、同窓会埼玉県支部の運営は主に県庁関係者が担っています。私は当初関心がありませんでしたが、中盤から運営に携わり県庁退職後8年間支部長を務めましたので年に数回は大学へ伺う機会があり、大学内の樹木の生長、女子学生の増加など驚くことばかりです。支部活動での課題は県庁以外の会員の参加促進、事務局活動を職場で行うことは困難な時代となっており人員や備品など体制の整備などが課題となっています。

高原での生活

退職後、夢であった高原での生活を実現することができました。福島県天栄村羽鳥湖高原、標高約９００m敷地約２８００㎡です。大変雪深いところで冬は行きませんが、4月から11月までの半分くらいは滞在しています。近くの山(日本３００名山二岐山など)登山や林道歩きゴルフなど楽しんでいます。蝶の来る庭作りを目指し植栽を進め現在までに敷地内で65種の蝶を確認、観察しています。近年はツマグロヒョウモン、クロコノマといった南方系蝶も確認され地球温暖化の影響がここまで来たかと驚きと不安を感じています。

ただ最近はご多分に漏れずクマ問題(私も目撃した)があり近くの林道はもとより別荘地内の散歩も躊躇する状態は残念ですが克服して楽しみたいと思っています。

卒業後50年

川名 晃

先ずは、皆様のご健勝と、ご健康を祈念させていただきます。

テーマの卒業後の活動と言っても皆さんに文章にして報告するようなことは取り立ててありません。五十年前のことははるか昔のことでほとんど忘れてしまっている有様です。ということですので、最近のことを私事で皆さんにはご退屈かもしれませんが、原稿用紙五枚分ほどお付き合いください。

最近、面白いなと思いやっていることは、テニスでもゴルフでもありません、保育園での登園時のアルバイトです、短時間ですが、大変疲れますが、子供たちの日々の成長がとても楽しいです。

四月の入園当時は、よちよち歩きをしていた赤ちゃんが、まだお話はできませんが朝行くと私に向かって歩いてきます。私の手を引いてお気に入りのおもちゃがあるところまで私をつれていきます。自分の手が届かないところになると抱っこをせがんできます。いろいろな赤ちゃんがいますが、私のことを『ジイジ、ジイジ』とよんでくれる赤ちゃんもいたり、朝のあいさつで私が「おはようございます』と言うと頭をペコリと下げてお辞儀をする赤ちゃん、抱っこ抱っことせがんでくる赤ちゃんと、いろいろです。

赤ちゃんと私が言っているのは所謂乳児ではなく一歳からですが、二歳になるとまた面白いです、言葉を多少覚えてきて自己主張をはじめます、嫌い、好きと日々変わりますが、本人は全く意に介せず周りは関係ありません、このくらいになると「おじいさん」と言うようになります。

いろいろなお話を自分からするようになります、ア

ニメ、アイドル、テレビなど何でも興味のあること何でも話をしますし、言いたくてたまらないようです。

三歳をすぎると急にボキャブラリーが増えだし、汚い言葉を平気で言うようになりますが、本人たちはそれを「ごっこ遊び」と心得ていて保育士さんの前では絶対に言いません、私は先生と思われていません。何でも言うことを聞いてくれるおじいさんです。

四歳をすぎると五歳、六歳になるにつれて私が遊んでもらっているようになってきます、子供は何でも遊びに変えるし、又沢山の遊びを知っています、こちらが教えられることが沢山あります。

毎日変わる子供、成長しているこどもをみるのがたのしみです。よって、楽しくすごすために健康には留意していますが、忍び寄る老いと付き合っていくのは大変です、保育士は体力が大切なのが身にしみてわかります。いつまでできるかわかりませんが、保育園から辞めてくださいと言われるまでやり続けたいと思っています。まだ始めて二年間はたっていませんが。

保育園でパートをする前は、施設管理でホール、研修室の貸し出し、備品管理などのパートをこちらは八年間もやってしまいました、規定の歳で辞めましたが、こちらはまた、お年寄り相手でいろいろ面白かったです。元気なお年寄りが、パートを始めたころは多いと思っていましたが、コロナからお客さんの数が減り、利用団体も変わり、数も幾分か減ってきた感じでした。当然です、六十歳の方は七十歳に、七十歳は八十歳になったわけですから。こちらはほぼ毎日フルタイムで働きました、長い間続いたのは何故かな、いまの仕事もそうですが、保育園も昭和の高齢者が同僚ですし、こちらも昭和です。昭和の感動で過ごすことができるのが良いのかもしれません。

そう思うとメインの仕事を辞めてから数か月間、会社経営の図書館に勤めたことがありましたが、こちらは決して悪い会社ではありませんが、若い社員が多くて年寄りはもたもたしていたせいか、居心地がよろしくなく、足手まとい思い辞めてしまいました、上

司からは仕事の部署を変えましょうかといわれましたが、何分申し訳ないとの思いが先になってしまいました。現役を退いてから、どうしたら楽しくできるか、考えてきました。

結局、段々体力が落ち、病気になったりの日々が現実ですので、これからどれだけ生きられるかわかりませんが、日々行くところ作り、人と出会えることを楽しみにできたらいいのかなと思っているこのごろです。

いろいろ遊びをやってきて、その都度出会いもありました。スキー、テニス、ゴルフ、山登り、ジムどれも長く出来たとは思いませんが、それなりに暇潰し程度にやってきました。今は散歩と朝のラジオ体操が日課になっています。家内も年を取りました、何処に行きたい、美味しもの食べたいと気持ちだけは減らさないつもりですが、体力と先立つものの不安があって思うようにいかないのが現実でしょうか。

今は、現役時代の皆様へのお礼と、学生時代の諸先生方、皆様方への感謝、感謝、感謝です。過去を振り返った時、どうしようもないほど悪いことも無いし、それなりに、自分の力不足を感じつつ、お会いした方々にご迷惑をかけながら、有難く思いながら、過ごしてこられたかなと思っています。日々新たな発見と出会いを楽しみに、体の元気なうちは外へ出ていこうと、「今日行くところがある」を考えています。ありがとうございました。

追伸

発起人の皆様の若かりし頃を思い出しつつ何とか書いてみました。久しぶりにパソコンに向かって疲れました。間違いは直しつつ書いたつもりですが、句読点、誤字、脱字を許してください。

イネと小麦と

小葉田　亨

農工大学作物学研究室を卒業後、一年の研修員(浪人)を経て京都大学大学院農学研究科修士課程に入りました。その後、博士課程に進み四年後学振の研究員になり数年して農学博士を取得しました。

台湾の淡水で(2025 年 5 月)

大学院ではアメリカ帰りの助手の方に指導をしていただき合理的な研究方法と徹底的に研究の推敲を繰り返すことを学び、日本の大学の教育方法との大きな違いを学びました。このような研究手法はその後の研究生活に大変役立ちました。

その後、学振奨学生と研修員を数年やってから島根大学農学部の助教授に採用されました。そして、生物資源科学部への改組などを経て教授となり六十五歳で退職となりました。五十代の初めに作物学会賞をいただきました。定年後三年間は本学作物卒業生の斎藤邦行さんの関係で岡山大学の特任と客員教授をしてから数年前京都に移りました。

島根大学在任中は三十代後半に在外研究員として十カ月、西オーストラリアのパースにあるオーストラリア科学産業研究機構(CSIRO)に家族と滞在することができました。親切なボスのおかげで海岸近くの家を借り、地中海性気候におけるコムギの水利用と生産について楽しく充実した研究をすることができました。ここでの研究でできた関係からその後何度か共同研究を行うことができました。冬雨と夏乾燥という日本と異なる乾燥した気候のもとでコムギやルーピ

ン、放牧などが行われる風景を見ました。また、旅行で訪れたノーザンテリトリーでは先住民アボリジニーの自然の中の文化、信仰の岩山、エアーズロックを訪れることができました。

その後数年して英国のレディング大学に二カ月客員研究員として滞在しました。ムギ栽培地帯から中部イングランドやスコットランドの牧草地帯などを見ることができました。

また、四十代の半ばころ鳥取大学の農経の先生からロシアとウクライナの稲作を見に行くからついてこないかとさそわれ二週間にわたり極東からコーカサス、ウクライナの試験場を訪問しました。現在、コーカサスからウクライナに移動した地域はロシアとの戦争で多大な被害をうけていて心が痛みます。

五十代にかけて約十年、京都の総合地球環境学研究所の共同研究員となり、トルコ共和国の大学との多様なゲノムを持つコムギの共同研究に加わりました。その関連で、シリア、アレッポの国際乾燥地農業研究センター(ＩＣＡＲＤＡ)に実験のために訪問しました。その後の内戦によって中世からあるバザールであるヌークは天井が崩れ落ち、高くそびえるアレッポ城の壁は崩れ、静かなモスクが大きく破壊されました。あの町で物売りをしていた少年や親切に店で教えてくれた女性の先生はどうなったのかと思います。我々の時代は阪神淡路の震災、東北の震災による津波や原発事故、近年のコロナによる被害、世界の大きな紛争などいろいろな事件が降りかかった時代でもありました。

島根大学に就職した後、結婚し二人の娘がいます。一人はデザインをしており、もう一人は声楽をしております。娘が声楽のためにイタリアに留学していた折にはそれを理由に夫婦で下宿に転がり込み、イタリア各地を旅行し、ベネチア、ナポリ、シチリア、イタリア南東地方を見ることができました。しかし、その後コロナが世界に蔓延し、イタリアも全ての空港が閉鎖されるため脱出しなければならなかったなど娘も大きな影響を受けました。

今は、退職後申請した研究費がなぜか通り、そのための実験を狭い家の庭に建てたビニールハウスで夏の暑い下ふうふう言いながらやっています。

また、何回かトルコに実験に行きます。時々、国内外の学会に出かけて俺が最高齢じゃないかと思いながら発表したりしています。まわりからはぼけ止めに良いとか言われています。一体自分は何を残すことができるのかと考えます。研究者としてはそれは論文しかありません。幾つかは論文としてそれなりに新しい視点、考えを残せたと考えています。ただし、読んでもらえないと意味がないですけれど。

農工大の学生であった時の農場実習や卒論研究が懐かしく楽しく思い出されます。こぢんまりとした大学の良さをしばしば感じます。私たちの分野でも農工大は多くの人が活躍されており時々農工大で大学生活を送れてほんとによかったと思います。これからも、実の在る大学として続いていくことでしょう。

卒業して50年

佐野　正己

あァ、50年も過ぎたんだ。4年の後期カリキュラムは、農学科必修2科目と英語の3科目が重なる事態が起きた。就職試験は全滅。このまま卒業できないのか？園芸研にその年就任した志村助教授の厳しさに、大学は出たかった。年明けに、ある肥料会社からの求人があると聞かされ、東京駅の目の前、新丸ビルで面接を受けた。試験もなく就職が決まり、慌てて、単位修得に教官にお願いし、卒業論文も卒業式後に提出したような気がする。ドタバタの内、なんとか卒業した。

50年を振り返ってまずは仕事かな。ある肥料会社で一度も転職することなく、1972年4月から2020年7月まで44年4ヵ月勤めた。肥料は農協で売っているものと思っていたが、メーカー→商社→卸・小売り→農家の流れを初めて知った。その肥料メーカーで普及部に所属し、全国にある卸・小売りと農家訪問し、肥料の説明、栽培指導などを行った。入社当初は、大阪駐在（商社の支店に間借り）として、近畿・中国・四国を担当。4年後東京に戻り、新丸ビルでの勤務となった。とはいえ農家周りなので、関東・甲信越・東海への出張続きだった。入社当時は、パソコンもなく資料は手書き、コピー機もなく青刷り、模造紙に書いたものを掲示して、肥料説明会もした。色々な考えのある農家と沢山話しができたことは、楽しくもあり、貴重な体験だと今でも思っている。

各地の地酒も沢山楽しめた。偶然とはいえ、良い仕事に巡り合えた。最後の仕事は、筑波に新設された、開発センター（肥料の効果試験や新規開発のための施設。分析と栽培を行い、水田・畑も併設）の二代目センター長として単身赴任し、新型コロナウイルス感染症拡大の真っ只中にサラリーマン生活を終えた。（なので送別会はなし）最近の若い人たちは、2～3年で転職するのが見られるが、新入社員教育では、必ず

「仕事は楽しんでください。楽しくないなら転職を考えなさい」と言って迎えていた。

私生活では、妻と二人の娘。上の娘は三人の子持ち。夫の仕事の関係で、6年ほどドイツ・デュッセルドルフに滞在。私も6回訪問し、ドイツ・イタリア観光、地中海クルーズなどを一緒に楽しんだ。一時日本に戻ったが、2025年4月にブラジル・クリチバに家族ごと旅立った。ドイツは良かったが、ブラジルは遠すぎるので行く気がしない。

下の娘は、音楽系短大を卒業後、ミュージカル系の舞台俳優を目指し、色々な小劇団に所属。某テーマパークでのショーに出演したりしていたが、コロナ禍で解雇。俳優業に終止符を打ちサウナ会社に就職、普通の社員でいるつもりが、熱波師の先輩に誘われてショーアウフグース(広いサウナ室で15分間、ショーを構成。その中で、ショーに見合った調合した香りを出したり、タオルを振ったりして、観客を楽しませる)を始めることに。2023年アウフグース世界大会団体優勝、日経新聞に掲載されたり、テレビ番組に出演したりした。25年は予選2位で通過したものの結局8位に留まった。娘自慢になってしまった。

さて、仕事をピタっとやめて完全年金暮らしをしているが、2020年から空き家同然の父の実家と耕作放棄された200坪の畑が千葉県館山にあり、放置できないとして管理をすることになった。当初は、家の管理や除草だけだったが、22年から本格的に住み着いてしまい、今では第二拠点として、自宅と行ったり来たり、20坪の家庭菜園を楽しみ、海を眺めながらのんびり過ごしている。

南房総といえば、冬が温暖で、花畑のイメージが強

いが、北風の強い時は外に出るとそれなりに寒い。良いのは夏。ここ数年の東京の異常な暑さには耐えられない。海が目の前の家は、冷房が無くても、30度を超えることは極稀で、涼しく過ごせるのでほぼ行ったきり。

最後に、健康に関する事。仕事中はストレスか飲み過ぎか、肝機能に注意信号が点っていたが、退職後は年一回の健康診断では健康そのもの。体重も10㎏減量、体が軽くなった。消化器系は良いのだが、2000年頃から腰痛に苦しめられ10年に「腰椎分離すべり症」の診断。レントゲン写真では、背骨が前後にずれているところがあり、思わず医者に、誰の写真ですかと問いかけてしまった。手術以外に治りませんと言われたが、まさか背骨の手術など決断できず放置していた。ある日妻と買物途中で、突然歩けなくなった。ただ立ち尽くすだけ、しばらくして歩けるようになったが、仕事中に再

入学時、津久井農場でのオリエンテーション

発したら大変と手術を決断。12年2月に4週間入院し、背骨にチタン製ボルトを埋め込み、今も背骨に入っている。歩くことには心配なく、腰痛もない。もう一つは、前立腺癌。これもひょんなことから見つかり、20年7月末で退職する月初めに10日入院、摘出手術を受けた。定期検査では、腰も前立腺も異常なし。1時間ほどの散歩と300ccの焼酎(休肝日はありません)が日課で、物忘れが少しあるものの、健康に過ごしている。そんなこんな50年です。

私の人生は「節目」だらけ

鈴木　土身

最初の「人生の節目」は、新宿の青年サークル

誰しも「人生の節目」がいくつかあると思います。

私の「最初の節目」は、小学生の頃、共働きの両親が、一人っ子の私を当時暮らしていた新宿の「地域青年サークル」に託したこと。優しいお兄さん・お姉さんたちが、私をスポーツや音楽などの仲間に迎え入れてくれました。おかげで登山にも目覚め、高校の部活はワンゲル。子どもたちのキャンプを手伝うアルバイトも。そのご褒美に乗馬を教わったのが刺激になったのか、何となく畜産に心が向かい、北海道大学を目指すも撃沈。親戚の禅寺に下宿し、新設「京都駿台予備校」に1年間通学。それなりに勉学に勤しんだ末、農工大に辿り着きました。

最大の「人生の節目」は、秋田県民になったこと

そして「最大の節目」が、なぜか秋田の医師からスカウトされ、大学卒業後、秋田県民になったことです。

私は、畜産について、もう少し勉強しようと考え、研究生として農工大に残る手続きを終えた矢先、某教授2人から「秋田行き」を説得されました。見学のつもりで秋田に着いたその日、先方は、私のために歓迎会を開き、新居や引越の段取りまで済ませていて、とても断る雰囲気ではありません。腹を決める以外の選択肢はなさそうでした。

ほぼ東京育ちの私にとって、言葉・食生活・人間関係に至るまで、そのカルチャーショックは絶大。覚えたてのギターで心を癒していたら、通りがかった地元の若者から「下手すぎて見過ごせない」と声がかかり、「歌うサークル」が発足。人と人との「つながりの濃さ」は、これまでの人生で味わったことがない感覚でした。

なぜか「医療の世界」に入って

それにしても「医療の世界」は、私にとって、未知以外の何物でもありません。しかし、実際に踏み込んでみると、高度な専門知識や技術だけに注目しがちな医療の根幹は、実はきわめて「社会的なもの」であることがわかりました。例えば、高血圧は、寒い秋田で塩辛いものを多く摂る、いわば県民病。背景には、生活環境・ストレス・世情不安など「社会的因子」が潜んでいます。私を秋田に招いた医師は、「治療は後追いでしかなくキリがない、予防しなければ解決しない」と感じ、住民に自覚と学びを促しました。さらに「生きる意欲を培う地域社会」が不可欠との考えから、私にその思いを託したみたいです。

やがて診療所が潰される

この仕事は、とても大変でしたが、やりがいのあるものでした。私は、昼夜休日関係なく、公事私事を混同し、夢中になって地域内外を駆け回りました。この「暴走期」に得たものはとても大きい反面、失ったものも少なくありません。当時、心配してくれた農工大の友人たちにはとても感謝しています。

私が勤務する診療所は、治療以外のスタッフも抱えていることから、経営的には赤字で、これを地元農協や行政・住民が支えていました。日本の医療政策が「公共」から「営利」へと舵を切る時代になると、経営者である秋田県厚生連からの厳しい指摘が増えていきます。医師は圧力に耐えきれずに他県へと移り、私たち職員は親病院へと転勤。その後、診療所は潰れてしまいました。

県内の住民団体で活動を続けています

私は、それから約20年間、2つの系列病院で事務員として勤務し、医事・資材・経理・総務・健診業務を経験。仕事自体は楽しく、学会発表など研鑽も積み、友人も増えました。一方、労働組合による全国的な「医療研究集会」にも深く関わり、2005年、病院を退職し、労働組合の専従職員として再々出発しました。

折しも、同年、系列の「鹿角組合総合病院(現・かづの厚生病院)」から、精神科が撤退(常勤医師派遣中止、病棟閉鎖)します。原因は医師を派遣している岩手医科大学や岩手県全体の「医師不足」。私たちは現地で住民団体の立ち上げにも参画。鹿角は自宅から車で4時間程の距離ですが、私は定年後の今も通い詰め、個人として携わり続けています。

鹿角での活動は、私の近況のメイン。左記の書籍等を読んでいただければ幸いです。

○鈴木土身『お医者さんも来たくなる地域づくり』
旬報社　2020年6月11日

○鈴木土身『医師不足の解決めざす住民運動』
日本機関紙出版センター　2024年8月1日

○最新の動向は、新日本出版社
月刊『経済』2025年12月号参照

あの「優しいお兄さん」が、今でも私のヒーロー

新宿の「青年サークル」で私の面倒を見てくれた優しいお兄さんの1人は、その後、弁護士となり、関西を拠点に、主に医療問題で「弱い人の味方」となって奮闘しています。その関係で、数年前に音信が復活。お便りには「昔、新宿で出会い、今それぞれ遠い地で仕事をしながら、医師の問題で接点があるなんて奇遇ですね」と記してありました。まだ再会こそ果たせてはいませんが、彼は、私にとって、「最初の人生の節目」で出会ったヒーローです。

土壌学研究室を卒業してからの50年を振り返る

對馬　健

私は航空写真測量を主とした中堅の会社に就職し、土壌調査ほかの自然環境部門の技術者として働きはじめる。同期入社はふたつ年上で九州大学林学科出身の太田君（30歳を目前に福岡県庁職員に転職）と一つ年上で東海大学海洋学科出身の岡田君（ＲＩＰ）という酒の好きな二人。勤務地が東京の繁華街の池袋ということもあり、給料のほとんどは池袋の夜の街へと消えてゆき、給料日前の切り売り生活を送る。

その後、土石流調査などの山地災害調査にも携わり、日本各地をまわり特権として温泉に泊まる。

変わった仕事としては、海洋学科出身の岡田君が中心となり東海大学の学生を動員した大規模な東京湾船舶航行調査にも携わり、東京湾に浮かぶ第二海堡（松田優作主演の映画のロケ地にもなっており、当時は釣り客も訪れていた）に泊まり込み、24時間1週間連続で航行する船舶の船種や大きさなどを調べるということも経験する。珍しい船舶としては南極観測船や空母なども通過するし、夕食は自炊で釣った魚介類を中心とし、カキも食す。

そのうちに大規模開発に伴う環境影響評価を担当することとなり、ゴルフ場開発や宅地開発に伴う環境影響評価などの技術者として、現地調査から住民説明会、さらには有識者による委員会などに対応した業務に従事する。

その中でも常磐新線（現在のつくばエクスプレス）開発に伴う環境影響評価業務は心に残る。現在のおおたかの森駅周辺の宅地開発に伴う環境影響評価に携わったのだが、ほかの駅周辺の地区や鉄道本体の開発に伴う環境影響評価を担当していたコンサル数社が集まり、一体化した調査報告書を作成し手続きを進めることとなり、動植物部門を担当することとなる。というのも地区内に当時としては珍しかったオオタカ

が生息していたためで、調査に当たっては、地元の自然保護団体の協力を得つつ、事業者側との調整を経て無事に業務を全うすることとなる。その後も何か所かでオオタカ調査を行う日々を過ごす。

そうこうするうちに56歳の一次定年を迎える頃、会社の状況があまり良くなくなり、会社における自分の立場を考慮し、母親の介護を言い訳にして30年余り続けた職を辞し、昔から念願であった無職生活に入る。退職の挨拶状は後述するあこがれのブラジルから発送したのだが、半分近くは郵送されなかったようである。

その後は名古屋で親の介護を数年行い10年ほど前に94歳で母を見送ってからは、悠々自適の生活を送る。

一方、サラリーマン生活を送る中で、大好きなブラジル音楽を深く知るために、たまたま目にした拓殖大学社会人講座のポルトガル語教室に参加するようになり、講師の高橋都彦先生や聴講生仲間と仲良く過ごし、様々な経験をする。

なかでも聴講生仲間の畑中さん(芸名を橘直紀という)とは親しくなり、2度のブラジル旅行に同行することとなる。彼は由紀さおりの「夜明けのスキャット」と同じころに同じレーベルからシングル盤を出し、ACBや銀巴里にも出演経験のある歌手で、リオ・デ・ジャネイロに数年住んでいたことがあり、音楽関係者を含めた現地の友人も多く素晴らしい経験をする。その時に撮った写真が、ボサノバの名曲「イパネマの娘」誕生にゆかりのカフェでの1枚(写真1)とカルテート・エ

1 「イパネマの娘」誕生にゆかりのカフェにて

ン・シーのシヴァさん(世界的に有名な女性コーラスグループのリーダー)のお宅で撮った1枚(写真2　30年近く前の40代の私)。

また高橋先生とのご縁で、現代ポルトガル語辞典(白水社)の音楽関連の項目のお手伝いをしたのも、名前は掲載されはしなかったものの今でも心に残る。

洋楽を中心とした音楽が大好きな私は、学生のころから桂枝雀や古今亭志ん朝も好きだったこともあり、母親の介護生活をしていた名古屋での息抜きに行き始めた大須演芸場での桂文我(桂枝雀の弟子)独演会から生の落語にどっぷりとはまり、今では落語三昧の日々を送る毎日である(年間百数十回の落語会に足を運ぶ。ちなみに音楽は数回程度)。さらに落語会の打ち上げで親しくなった瀧川鯉昇師匠(写真3)や柳家はん治師匠をはじめとして落語愛好家の皆さんとも楽しく語り合う日々を過ごしている。

写真4は母親の介護が明けて仙人状態になった私と三遊亭兼好師匠との1枚と2024年にあこがれの桂南光(桂枝雀の筆頭弟子)師匠とご一緒した時の1枚(写真5)です。

2　カルテート・エン・シーのシヴァさん

3　親しくなった瀧川鯉昇師匠と

4　仙人状態の私と三遊亭兼好師匠

5　あこがれの桂南光師匠と

からだとの闘い
齢にあらがわずまいりましょう

中（氏家）徹

卒業して概ね50年でしょうか、皆さん古希を通り過ぎ喜寿に近づきつつある年齢ですね。物故されたお三方に黙とういたします。私も2回ほど命の危機に見舞われ、物故者に並ぶところでしたが、「悪運」でしょうか、未だにこの世にとどまり続けております。きっと神様が「生きて人の役に立ちなさい」というメッセージを送ったと信じて、今日まで定年を過ぎても「働いて」います。

こんな服着て動いています

今も働くには、自分なりの意味がないとできませんので、老害にならないよう十分に気を付け若い人達が心地よく働いていただくことに細心しているつもりです。実は、北関東の某私立大学の学長を「担当」していますが、内容は「下働き」と実感しつつ、教職員から「学長」と呼ばれない人であることを信念に、ゆっくりと働いています。もう72歳になりますので、いつでも降りる準備をしていますし、その日を心待ちにしています。持病がありますから、残りの期間を健康で安寧に過ごすことを願って、「その日」を待っている日々です。それも、2回ほど「死にかけて」おりますので「怖いものなどない」という適当な「勘違い」のおかげかもしれません。

2回の命の危機を少し記してみます。まずは2013年4月（59歳時）の急性心筋梗塞です。物語にあるような新幹線車中発症で、東京駅まで何とか意識を失いつつも持ちこたえ、救急車にて聖路加国際病院で緊急ステント留置にて助かりました。発症から2時間以内に再灌流しないと死んでしまう心筋梗塞ですが、ぎりぎり1時間45分での再灌流で助かりました。心

臓が再灌流した瞬間の「快感と安心感」は天国とはこの感じかもしれないという、人生最大級の「幸せな感情」でした。ただ、1時間45分間も心臓の冠動脈が詰まっていましたので、心臓の三分の一は壊死してしまい、すぐにハアハアする行動状態でした。そこで医師の指導のもと自ら心臓リハビリを行い、脈拍を113以上に上げなければ安全な生活を送れる状態を得ることができまして、その水準で運行中です。この経過は8割程度が死亡してしまう条件でしたが、奇跡的に助かったと思います。一生10種くらいの薬は必要ですが仕方ないですね。

もう一回は2023年（69歳時）の「膀胱がん」です。なぜか10年ごとにイベントが起きます。身体の経年劣化でしょうね。これは心筋梗塞のフォローで続けている診察のエコーで偶然見つかったものです。見つけて下さったのは聖路加国際で心臓を助けていただいた医師です。「継続は力なり」です。すぐに泌尿器科で内視鏡の手術となり、2回の手術を経て現在も再発予防チェック中です。お陰様で筋層に達していない上皮性がんで除去できていますので、オストメイトにはならずに済んでいます。このがんも早期発見で助かったと思います。診察もうけず、働きすぎや不節制をしていたら予後はうんと悪くなったと思います。心筋梗塞ほどではありませんが、年齢も考えますと、「死にかけ」の一歩手前で助かったと感謝しています。

卒業後は医療から皆さんに健康を届ける仕事をしていますが、みなさんは多くが食領域から健康をお届けする仕事をされており、尊敬するばかりです。

平地面積の少ない日本は食糧自給が不利な国であることが学生時代からずっとそうです。きっと多くの試行錯誤がなされていてこの状態でしょうね。食へのニーズが多様化してしかも安全面でもハードルが上がってきていますから、日本の農政は財務省並みにメインの省庁に格上げして本気で先を見据えるところだと思います。小さくとも偶発的な小競り合いが戦争に発展しやすい環境ですから、その影響で食糧輸入が

大きく制限される可能性もあります。

金利や円相場問題もアクティブな状況です。どうか本気で安定して日本人の胃袋を満たしていく国のリーダーが現れれば教科書に載るレベルと期待しています。医療につくものですが、農工大の卒業生として、こんなことはいつも最低考えています。学生さんの授業でも農業・食料問題は栄養学と関連させて伝えています。

実は専門は子どものリハビリテーションです。今でも学校で学生に教えながら、子どもたちと保護者さまと一緒に歩んでいます。従来は、脳性麻痺や筋ジストロフィ、二分脊椎症などのお子さんが主体でしたが、今日では圧倒的に知的障害や発達障害(神経発達症)のお子さんが主な対象となってきています。これらは新しいリハビリテーションの領域でいまだにエヴィデンスが不十分です。年寄りの私たちはエヴィデンス作りを担当しそれらを啓もうする仕事を仲間と行っていますが、とても楽しいとりくみです。また、ライフワークの「重症心身障害の生活評価指標」も3回の科研費をいただき、今も続いていますが3年後75歳で完成予定です。欧米では重症児はリハビリテーションの対象外ですので評価指標は日本で作るしかないということで年寄冷や水をしています。

職場には4人の農学部卒がおりまして、すべて大学が異なる(北大・農工大・農大・昔の獣医畜産大)ので、Agri Quartet を結成し楽しく農業を語っているんですよ。農学部はすそ野が広いですね。

次に1・19のような機会があれば、生きていれば参加したいと思います。今回は残念ながら先約があり参加できませんでした。皆さまのご多幸をお祈りいたします。

大寒

50年の歳月

馬場 仁

農工大学を出てからはや50年が経ちました。光陰矢の如し、とはまさにこのことであります。

家に戻って、父親の農業(米・麦・養蚕)を手伝って、少しずつ農作業に慣れていきました。当時は、養蚕が盛んで、現金収入としてほとんどの農家が取り組んでおりました。

しかし、養蚕業も絹需要が減ってきて、衰退の一途をたどり、現在では養蚕をやっている農家は皆無であります。時代が変わってしまいました。

50年の間に、水田や畑の基盤整備が完了して、昔の田園風景は、なくなってしまい、寂しいところもありません。農作業も機械化が進み昔みたいな共同作業もなくなりました。

現在は、コメ・麦を約1ヘクタール栽培しております。米はキヌヒカリという品種です。埼玉北部では、代表的なお米です。味も良いです。麦は、あやひかりです。これはうどん用の麦です。畑には、ブルーベリーを栽培しております。ハイブッシュ系とラビットアイ系の2種類です。ブルーベリーも新しい品種が次々出てきており、品種名を覚えるのが大変です。

今年は、米騒動により、お米の価格が上がり、社会問題になりました。困ったものです。消費者にとっても、生産者にとっても納得のできる価格があるはずです。そうしないと日本の食文化の崩壊につながりかねません。

そうはいっても、私たちの地域でも、高齢化が進み、農作業をしている農家はほとんどの方が70歳以上です。後継者のいる農家もありますが、ほとんどの農家は兼業農家であり、現状維持が精いっぱいといったと

ころです。

日本全国の農村地域で、今後の農業後継者をどうするかといった議論が、行政・農協・生産者の間で行われておりますが、なかなか名案がありません。喫緊の課題となっております。

さて、話は変わりますが、70歳を過ぎたあたりから、ささやかなボランティアを始めました。それは、近所の児童の登校の見守り活動(スクールガード)です。

近所の先輩方と一緒に小学校まで歩いていきます。往復で約1時間かかります。子供たちの元気な声に励まされ、一日が始まります。朝日を浴びながら歩くというのは、実に気持ちがよく、その後の農作業も元気に行うことができます。まさに一挙両得です。

70歳を過ぎても元気で働けることに感謝をして毎日過ごしております。与えられた命を精一杯生きれるようこれからも前向きに歩んでいきたいと考えております。

50年ぶりに皆様と再会できることを楽しみにしております。この同窓会を計画してくださった方々に感謝申し上げます。ありがとうございます。

記念誌に寄せて

吉野　りよみ

「学校の先生だけはならない。」と思っていた。小学校時代の恩師「上洋子先生」、中学校時代の恩師「長谷孝二先生」、高校時代の恩師「磯部先生」など今でも懐かしく思い出すくらい尊敬し影響を受けた。私はそういう職業に就く資格はないと思っていた。

私はインドに行って稲作の農業指導をしたかった。ガンジーにあこがれ、何も知らないのにインドに行きたかった。それで無謀にも農工大学農学部農学科を受験したのだった。

入学し、研究室を選ぶ時になり、インドに行って稲作をしたかったわけだから「作物学研究室」以外の選択肢はなかった。ところが、作研の小倉忠治教授がおっしゃった。「うちは、女子は教員免許を取ることが条件です。」私は素直に「はい。」と返事をし、必死で教職課程の単位を取ることとなった。

卒業の年、農業改良普及員の資格も取り、インドに行くためには実務経験を積まなければならないから、まず農業改良普及員として働きたいと考え、東京都、埼玉県、千葉県の公務員試験を受けたが全滅であった。先生方が心配してくださって、渡部直吉先生が、「千葉県の学校の先生になりなさい。私がちょっと千葉の知り合いに会いに行くから」とおっしゃって連れて行ってくださった。

中学理科で受験し、幸い東京都と千葉県で合格し、千葉県の教員となった。ただし、面接で「当面は小学校でいかがですか？」と言われ「はい。」と返事をし、そのまま30年間小学校で働くこととなった。

教育実習は中学で理科の授業をしただけ。小学校の指導案も見たことがない。初任の船橋市立薬円台小学校で一から教えていただいたが、いきなり4年生の担任を命ぜられ、毎日毎日どうしたらよいか分からないことだらけで泣いていた。もうだめだ。辞めよう。やっぱり私には無理なんだと思った時、同僚たちが

「辞めるな。転勤して低学年をやったらいい。低学年が向いていそう。」と言って、校長先生に話に行ってくれた。

転勤先は船橋市立大穴北小学校。女子のほうが多いクラスで、初対面の日から「先生、先生。」と寄ってきてくれるクラスだった。先輩から「私、毎朝『エルマーのぼうけん』の読み聞かせをしてるの。お話の続きが楽しみで学校に来てるっていう子もいるの。」と聞き、早速真似をして「エルマーのぼうけん」の読み聞かせを始めると、本当に子どもたちは目をキラキラさせて聞き入ってくれる。

学年会も楽しかった。学年の先生方は悩みを聞いてくれて、授業も見せてくれた。学年会で、遠山啓先生の算数の指導法を教えてもらったり、国語、理科、社会、体育など一緒に教材研究するのが楽しかった。研究授業をさせてもらったり、県の公開研究会の授業もさせてもらった。小学校の教員になれてよかった。小倉忠治先生のご指導が、私の人生を開いてくださった。心から感謝している。

退職後は、船橋退職教職員の会で「教え子を戦場に送らない」ための活動をしている。初任のころは、まさかこんな戦争前夜のような状況になるとは思ってもいなかったが。

また、現職のころから千葉県市民オンブズマン連絡会議に加入している。きっかけは、「算数の教科書は、なんでこんな使いにくい出版社に変えたのかな？教科書は誰が選んでいるのかな？」と思ったことである。ちょうど情報公開条例ができたころで、教育委員会に情報公開請求したが全て不開示だった。どうしたら開示されるのか調べるうち、市民オンブズマンの存在を知り、入れてもらった。情報公開を何度もしていると、少しずつ少しずつ開示される範囲が広がり、今では教科書選定委員名簿も専門調査委員名簿も議事録も開示されるようになった。

現在取り組んでいるのは、千葉県議会議員が毎年海外視察に行っており、昨年はドイツ・オランダ６日

間1人169万円も税金を使ったので千葉地裁で住民訴訟をしている。お金がなくて弁護士さんをお願いできなかったので、99％認められないと思うが、それでも全力を尽くしたい。

自作のチラシを手に、千葉地裁前にて

野菜への思い

渡辺　一義

卒業時は就職先がすぐに見つからず、作物研に籍だけ置いていたところ、石原先生から埼玉県が農業改良普及員を募集していると紹介され、埼玉県に就職。

就職後は農業改良普及員、園芸試験場、農業大学校、専門技術員などの部署で野菜に関する栽培試験・技術普及、農業後継者育成などに携わりました。

20代半ばに園芸試験場勤務を命じられ、キュウリ、ブロッコリーなどの栽培研究に6年間取り組みましたが、研究成果をあげるよりも、昼休みに職場の皆さんと遊んだテニスに夢中になってしまい、ついには職場のテニスだけでは飽き足らず、地域のテニスクラブに加入、土日もテニスづけの日々でした。

自分は試験研究に向いていないと悩んでいた時、農業大学校へ異動。大学校では、施設野菜専攻コースを7年間担当、学生とともにキュウリ、トマト、イチゴなどを栽培。大学校での農業実習は率先垂範をモットーとしていたので、試験場で学んだ栽培技術が大いに役立ちました。学生は1年生の後半からプロジェクト学習に取り組みます。その時のテーマ決めが一苦労。幸いにも試験場時代に触れていた都県の研究成果などが課題設定に役立ちました。大学校では学生と自由気ままに野菜を栽培し、楽しく有意義な日々を過ごしました。

40歳からは農業改良普及員、野菜専門技術員として野菜産地の育成が仕事となりました。その中で最も印象に残っているのは、野菜専門技術員として入間地域担当普及員が行うミズナ生産拡大の取り組みを支援したことです。埼玉県でもミズナは漬物用とし

て昔は栽培されていましたが、当時は漬物需要もなくなり、栽培はごくわずかにまで減少していました。ですから、ミズナを新たな品目として生産振興したいといっても、なかなか賛同してくれません。

しかし、私は若い時に赤提灯ではじめて食べたミズナの浅漬けの味が忘れられず、ミズナの若取りであれば漬物以外の用途も期待でき、売れると希望を持っていました。そのような時、川越市内の百貨店で京水菜が５００円／袋で販売されているのを見つけました。

京都から輸送費をかけて出荷するなら、埼玉で生産すればもっと安く販売でき、確実に売れると直感。そこで、地域担当普及員に、なぜ京都で水菜が普及したのか調べることを提案しました。

その普及員の報告では、当時、京都府は新たな野菜として伝統野菜に着目し、その生産振興を図る中で、ミズナを生産している埼玉までその作り方を調査に来たそうです。つまり、埼玉県を参考にしてミズナの新たな出荷形態を創出したとのことでした。

報告を聞きより支援に力が入りました。私自身も大田市場に新任普及員の市場流通研修で出向いたおり、市場内に茨城産ミズナが多く積まれていることに愕然。市場動向を担当者の方に聞くとまだまだ売れる商材で価格も安定しているとのこと。調べてみるとキューピーがミズナのサラダをテレビで宣伝し、消費ブームに火が付き、茨城県が生産を始めたと知りました。

オイシックスではリバイバル野菜という名称でミズナを紹介していました。ミズナが注目され需要が増加したものの供給が追い付かない状況となったことで、埼玉でもミズナの生産が拡大していきました。消費者ニーズを予測する大切さと難しさ、面白さなど多くを経験する事例となりました。

入間地域の新野菜はチンゲンサイ→コマツナ→ミズナ(産地の基幹作物はホウレンソウ、サトイモ)と10年単位で変遷してきました。産地では次の新たな野菜

を探るようになり、私もミズナの後継野菜を検討しましたが、適当な野菜を見つけることができず埼玉県を退職しました。数年前から連作障害回避野菜として入間郡にはなかったネギの栽培が少しずつ増えています。深谷ネギに次ぐ新たな産地になることを願っています。

普及員時代は産地を育成することが普及員の仕事と思っていました。コマツナ、エダマメ、ノラボウ菜などの生産支援にも関わりましたが、私が産地を育成したとは言えません。普及員は平均3～4年で異動します。短い期間で産地開発はできないことと、普及員には資金がありません。だからこそ生産者をはじめ市町村や農協・農業機械メーカー・種苗会社等の協力を得て産地づくりを進めなければなりません。定年近くになって産地づくりのきっかけを地域に根付かせることこそが普及員の仕事とわかりました。地域の関係各所が協力し、同一の目標を持てば地域は変わるものと思います。

県を退職した後は農薬関連の民間企業に10年間勤め、各都府県が発表する病害虫防除情報を要約し社員に提供、営業ツールとして利用してもらっていました。また、会社の新事業の立ち上げにかかわり、アイメック農法による高糖度トマトを生産しオイシックス等に販路を開拓しました。アイメック農法の新規参入者向けのトマト病害虫防除コンサルでは。コンサル料に見合う情報提供をしなければと私なりに苦労しました。アイメックトマトは糖度10～12度、とても美味しいトマトです。そのトマトを食べますと普通のトマトは食べられません。皆さんも一度は召し上がって下さい。

3年前からは民間が運営する障碍者を雇用する企業向け貸し農園で野菜の栽培支援をしています。スタッフの皆さんが楽しく管理し、できた野菜を収穫して喜ぶのが一番の楽しみです。私ができる精一杯の支援をしていきたいと思います。

東京農工大学農学科昭和47年入学クラス
卒業後50周年記念文集

思い出の記、そして現在

雲と自由の住むところ

発起人・編集

青木隆夫

指宿光明

大伴秀郎

古西章

佐野正巳

連絡先

大伴秀郎
177-0043 練馬区上石神井南町 19-9
hidero.ohtomo@jcom.home.ne.jp

印刷所　有限会社山田スピード製版
〒815-0031　福岡市南区清水 2-15-30
TEL 092-511-5972　FAX 092-511-5977